



香石菴書

十一  
川

79
585
3.





門 ヲ知  
冊 535  
卷 八-X3

大枝流芳子著

附錄  
香道奥之槩

皇都 玉枝軒發行



香道秘傳附錄奥之槩上

大枝流芳 著

奥之槩 小引

曾聞一柱煙中得意九淵塵裡偷  
閒日月羨庭堅之槩也之風雅  
溪逸之士乃け道よゆもゆも山の  
ぞくしゆば唐も花暎が香傳洪  
留が香傳得泰が香深なること

香道奥之槩上



りもつて香と歌の御記より採り  
け因乃好むる歌少記と採りて  
りて著と所の書あり集て香道秘  
傳とつて御記と香数一美数せり書  
なりとつて御記も詞簡ゆへ辨  
略してゆへに記のありゆへに  
深意とありてに簡略と補ひけ道  
小な紙ゆへにけりてに奥儀と約

ゆきたりとさしりてに香  
道の樂をありてに後と後と  
心なりとゆへに記するゆへ

○雪月花集考

右雪月花の香次身と本書に記す  
は六十六種あり志野宗溍の定ら  
六十一種より別る流しはけ六十六種  
乃香と名を著すなり也流家と事代



の秋に載ゆらん

太子和州法隆寺に納る御徳太子親

音の像は此のまゝ本ありて其の

くはと相に納るはと多し和乃太子と云

香甚くして日本香ありは始なり蘭

奢侍、南都東大寺の什物と云

聖武天皇の御多の世に勅封ありて

下草創の將軍一寸四方つ切乳給ふ

なり信長公元龜三年五月十八日切

乳給ふ御代ハ慶長七年六月十日

切乳給ふけ給ふ御事なり太子掃

り事案と云へ今日蚊脚程も云

るの傳り事ありは給賣と云へ今も名

と呼香ハ多く是物なるもの少く偽名

多し太子ハ一向の御事なり是

と終てる記事ありて蘭奢侍今南

香通集の支所



都に残りよの三費五百目あり本の  
 長さ六尺八寸ありと云  
 紅沈の紅麩と書し半あり考はく  
 ふわり是も初封して東大寺ふあり  
 本目今四費七百六拾目ありと云  
 別も大切なる事あり一程香の  
 余別は茶奢侍考一巻と編て背ふ  
 かくと

その次名香目録も十六種の外は  
 家よあり所の名香目録也今計  
 百三十種あり  
 京極道卷取持の香目録なり道卷  
 姓作の本名も氏号京極作波利宿  
 應安年中に卒と乱世に生れるが  
 風雅と樂し香と心往古の業  
 物と月ひふけ入道香一本の沈水香

香道集の巻上



南と用ひ貴殿一とぬく名として命  
 ぜいけい人より起まり香道の開祖と  
 云づ一け目録の香針三百七十七種  
 今世また一くも名ある香ありは  
 父を養ふと一と道巻よりと二百六十  
 餘年ふたつあり

奥書に云三條前内府とあり西三條殿  
 逍遙院也天文六年十月二日薨去

ありけい本と志野宗信の清字と  
 のるり波渉い飛鳥井は松や松  
 うふ是の飛鳥井乃雅俊の雅綱の  
 涉等が心づ一と天正二年の年号は  
 宗信没後の年号されは是の宗信が  
 傳寫の附加一と年号するは一と宗信が  
 写す時乃年号とあるは奥の  
 宗信が六十一種と名と同年同日也



宗儀がからしに必なり

○宗信筆記考

凡香の樂ハ間靜の歌めて之儀  
方とをくくべ人の間とわその務  
員とをくくべ人の事ハ皆後乃世ノ事  
一ハ事なるべ一焼組の香ハ何れ  
名とて付合せく焼組ノ事具  
事ありて古雅なるべ一香ハ  
色ありきもそをくくノ品味ハ此節

香道傳の支所



白く意味ありてあるは古めくくさび  
 或はくさやうは新よふくの木所味  
 のわらうひうとまいた品兼味なら  
 本とてこれのが行くの白ひきするを  
 のまればおろし油らうきらめいあまじと撰  
 ひとろし金さくあるまぐ古人の教をま  
 らふわれは優劣とわすそつん名とて  
 付合せら事よりて雅真さるべし秘伝

乃人の志ひく辞正さく先は焼く事  
 の大根とも名は付合者わくは焼く  
 教様よ及びて次方よ印者の人よ後  
 らばか伝具わらんがたあるらとんく  
 香と焼くよよはまぐよわくがれいじ  
 がたわひさくもゆきとも高所は焼  
 物んよは名録よくたきらひは法  
 みたら金一花乃明月の夕暮宴具

香道真の支所上



二三様もゆく魚は只その所の生具  
なれば都合せらる香竹もも焼きて  
魚一社具のこまればさひてはやく  
る向ぐあはれも志ゆき人いんはひ  
あふぐと事なり

四季乃香ハ香の名よりして四季物  
くの景物の名わら香とりまら香  
袋香合よ入るよしと香の名わら

香と入る事なり一帝小匠約せし  
も二三様香も魚と香とわら一不  
備南産の香と焼ゆる生具わら魚一  
あ一も四季にわら香と焚事ハ香を  
魚一とらゆはわら香も香所置  
乃時之内の香れ香と焼ゆるけ本  
書よゆきハ焼魚事なり志雜若  
類とどこの名わら香と所わらハ名く

香道真の支所上



續ゆらんを先する凡和守乃四季意  
雜わらぶとて一尤季にらしてらびじ  
本所わると云候もわり

よくの香と凡十種の名香をとりよ

なりとてよれた香と焚一わとあく

藤木と焼ゆらん具多くすへゆらま

府具と改り焚べるとため丹處沈外と

と焚具と改りどる奉り沈外と

内香よゆらた子細わら奉りりてれど

始り十種の香をど焼出と魚らに

付交り主方より焚きゆらん程を

心づひわらん奉り

香のみ息七息のうへへべら奉り

人乃授り紐香十人よりうへ三息み

息のうへへへに  
名香本がら多く焚きまら奉りて

香道真の支所



名香ハ自家の産物たけのよみあつと別て  
名香ハ天下の寶物たけをばらばらに多く  
焚ゆらんけがらあるべき事さるるに  
白の蔭まきまきといふ一多く焚へる  
らゆははらも具るものなるを  
より名香ハ牧脚まけ又ハ馬尾三分なご  
P傳まははらげら焼へる事さるる  
よふよりまらご多ハ笑み記事とさ

ぎん小香乃沖うちまごられ付つくハ小刀  
よそそげハ内指うちさよめ水みづと付て沖うち  
まら一そのまらまら根ねよまらつと  
ねらや一湯水ゆよ一ハにまら根  
ハ然ぜんよくまらるものさる火ひよくら  
甚ま熱一  
根ぎんの産うみよ香筋かとわら事こと古ふるより  
乃のはらり高流たかを帯およハ香筋かよ産う

香道真の支所上



此は心事なり宗信の法にまゝ香範  
 てりも根と墨をせりき根と墨の製  
 そのころ  
 其は心事なり一も終り乃書也  
 根と墨の事未考後世根と墨の  
 起りなり一も終り乃書也  
 其は心事なり一も終り乃書也  
 根の墨取ひまり終りなり一も終り  
 其は心事なり一も終り乃書也

此は心事なり宗信の法にまゝ香  
 範所口傳あり事なり一も終り乃書  
 其は心事なり一も終り乃書也  
 根の墨取ひまり終りなり一も終り  
 其は心事なり一も終り乃書也  
 中にて委かへゆらん  
 就は心事なり一も終り乃書也  
 日野の子湯殿の御家方なり一も終り  
 合香なり一も終り乃書也

香道真の支所上

十一



春日野の花は幸の芳中より燗燗入る  
とせんゆはくは花事あまぐり

巻一

東山殿は足利尊氏八世義政公なり  
号慈照院茶香の甚人なり清小  
所安新は紫本の折宗信へ香は所  
望の内八重垣と焚きし事い出雲八  
重垣の神祿の意よりなるべし

白とんをかりるるの意味よくく  
分別して真の真で焚べし

香爐あけまの本書の流のあまぐり  
あまぐりやともうと又南流ははゆ  
色漆物とりり茶かどのの内茶碗より  
へいごごごぐりく寸法は九七寸に八寸ど  
かりより文は行りて七寸由るなり  
新巻より鶴の香爐より用り奉水は縁

香爐の流の意よりなるべし



あるをなればなる家飾りも鴨井井  
 天井をどりくも同意なる棟よある鬼  
 瓦と云ふものも九折の二川ゆへ水成  
 つらどり中とよせぐの意なり鴨の香  
 煙と相りもけ意なり焚つと香しけ  
 心ばいあぶ一 物の字本あひのと云字されども  
け國くくかよと云字されども  
野鴨家鴨  
も別名也 鴨の香煙の圖宗入る圖よく  
 清取酒一の法を書ゆらら一

く初心の人のゆへ一終く考又口授  
 寸一  
 香煙魚よのせ物と幸ハ昔人のと小南  
 らりり破ハ素道よ三層天目と用り  
 同トかりも平人よハわらゆき事如  
 色一真五不案用よて色事と物とと  
 も色ととつゆ向がき事とら平人の香  
 煙けられとてきく一

香道集の巻一

十二



香爐三等の清取後一常くんかく  
魚一香道とんよがふんハ礼とみさ  
ろくろく

兎美衣女は手渡は香爐とせざら  
事古礼あり禮男女授受不手を此  
意方るる一先又常にた一さじべ一組  
香あは女意の教されたままぐりり  
聞事もあるる一るの肉の肉間を

衣よ着てをぬわるる一たも渡わらま  
トも事あり

朽板めつるるり深き子細あり秘  
しそ傳しるるわらぬよのぶじ  
出とれ付ハ先座とわらじべ一善日乃香  
るは始よりわらめ事されども  
よ焚よはたつる座ありある事あり先  
わらぬてりるるりえと是と靈



所とつりまう

常飲の筋目の事いおん口傳とていふ

てあふも〜ぬ口授とてい

香煙のせふとけぬらとりあさるぬらの

中へせらると煙く〜とて聞香煙

ゆはま〜煙く〜とてとてきき

世よ一まはら〜又香煙の中を

せふとて飲わりたさる供あり所を

せら〜りりきりれど銀葉を取し徳を

わ〜所と入垂ねを得わらぶき事さう

卓へ〜ぬくか〜世よ多く知事され

ハ悉くあらむとかんぐんの事ハ世よ多く

と〜と東山殿沙揚記よわ〜ゆ湯

り〜と別よ寸法格好あり

茶〜湯の内乃番別よわ〜多〜香〜

茶病路香煙ふわりと〜はひ〜



濃茶とつりきり

香袋の結はさめくじとびやうあるなり  
そ外十種香箱の袋香煙袋は名  
多々小箱より大より花結とそふく  
花名花箱の形は結より別な花結  
乃書一卷ありて白紙と名付て箱  
よかくと結の事ハ面授口決するてハ  
傳ぐ一香袋の事奥よりく

製やう寸法と著一竹

是まが四十九ヶ条ありけり別て秘傳とよ

蘭奢侍の字が秘事なりけり事ハ今世

よ多く知がく一東大寺と云文字

ら字の内よあり一云傳方なり蘭

奢ハ胡語之麩巻也と朱子語類及事

物紺珠ふよりてなり

香煙火よりて時ハ香筋おんちんと云おんちんよ

香道真の支所

一六



て火元はく事火氣とつて海せんが  
 たるる古の火筋とつて火味とつ  
 道臭るにすくぐー又火元へく入  
 ぶるのりらーめても香引散香香媒  
 るくもて用る事さう委く香志よ  
 載ゆ

床よ並河盆より口傳者一とする  
 軸脇軸中軸之のつて又所  
 載ゆ

揚ふより多々並所あり口授さる  
 海はく  
 香とくやうに色事ふき香のた  
 ありき紙は色ぬがう一た  
 うと刺ぐーと  
 香爐よ火取事香才一く要なり  
 古く定と片おひ思つあり底のち物  
 とはわーたよつとよと入るぐー始



一かきんく弱きたのわくさの座  
 のおひらぐんまそつりつ弱きよつてあ  
 本書古極よ二年さおとあつ考  
 正し辨ずらぐく年の字よはれ字  
 片らぐくよつてさおたりぐく降勝の  
 後まよよつて座つくとゆきはらき  
 よ酒ぐさの座の二年さつはと一分と  
 とお物と同ひるれぐと誤るぐく一と

一分おとハ銀糸とつりよかたぐくゆき  
 子物よえろお物いよと無名物よえど  
 みるふたうぐんつよきよつた自そんち  
 極一けいぐんハ面接よあされ知じ  
 火うぐんハとかく切ちんよあされ得ざ  
 一ちつよもき香火よつて香本所り  
 ころおのくりよ奉古人の編委く  
 けくかごハ授とぐく一因ハ香



さぐは別べつてあがれあがればらばらやうやうににまま一  
 法隆寺ほうりゅうの赤旗せき檀だんよりと云い既よひ戸ま皇子み親ちか  
 音ねの像ざうと他たりりをを手てひひるる割わりををととて  
 箱はこは細こ々々今いまに彼かの寺てら乃の付つけ相あひよよそ人ひと間ま  
 小こづる事こと多たるる此こゝ香かうるる宗そう信しん時とき代だいもも也  
 出いるる所ところ法はふ寺てらと云いてて角かくのの穴あなよりより角かく  
 了りょうしてして世よはは弘こうららととわわ中ちゆう一いつげげかからら然ぜんと  
 ののせせししもも加かわわるる事ことととめめうう小こ書しよるるやや

秘ひ伝でんるる或ある大だい家けよよ金きん子こ口くち又また十じゆ百ひやく名な也  
 ててちちりりしし事ことわわりりおお月げつややままのの然ぜんるる  
 のの事こと多た一いつ法ほう隆りゅう寺てらよよわわららにによよりり沈しんんん  
 香かうのの名なととななるる又また太たい子し乃の香かう然ぜんるるやや  
 香かうるるれれむむはは名なととかかどどりり太たい子しとといいふふるる  
 道みち一いつ枚まいちち丸まる本ほんととわわららいい沈しん香かうるる是これ  
 八はち海かい人にんのの猷ゆうせせ一いつ沈しん水すい香かうなるる一いつ  
 東とう大だい寺てらのの事こと多た前まへよよ委ゑくく辨べんじじいい宗そう信しんのの

香道集不抄

十八



書は片一寸四方とわり又一枚は一寸八  
分ともわり

三吉野より山下轉倒錯乱せし事考

正乃中又辭也

うゝ孫の事一二三とかさへうゝ孫と

刻むる有り教あるのふらうめちる時

うゝ孫はるれはるうに云しり

丹霞の本佛像より丹霞和尚本仏

像とつりて出たは焚し加事とて名に

名付しからるゝの小事も和し

せむと三条殿へは親戸さらけ事

て沙家の事とくろり知るゝ

宗祇の姓は飯尾紀州の人連子と好

と香と時とて積よるゝ人さる

物の香煙同やうなつゝの事か出

能くすまとてゝおんぎやくの事渡



と方へ尾とじけまじら事ち要るんし  
 まつとら香煙とまじりくとおまじり  
 まわらとた乃方右の方の人へ液と事  
 と云と心得べ一應まじりて我たふ液の  
 事もわり右ふ液の事もわりとがく我  
 へ尾のうとじけまじり液もあがり  
 心得べ一  
 香煙火つまは時まじり一應と行か  
 一

と急よかんと事とまじり香煙  
 根のま中よまじり液もあがり  
 とまじりあられまじり液もあがり  
 つくやまじりまじり液もあがり  
 口作あつたり  
 八卦香煙の四季の卦と考まじり方へ節目  
 付節まじりまじり液もあがり四季  
 所とまじりまじり液もあがり

香煙火つまは時まじり一應と行か

一



改<sup>て</sup>子<sup>そ</sup>宗<sup>そ</sup>信<sup>しん</sup>時<sup>じ</sup>代<sup>だい</sup>四<sup>し</sup>季<sup>き</sup>の<sup>の</sup>原<sup>はら</sup>と<sup>と</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>  
 俗<sup>ぞく</sup>流<sup>りゅう</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>辨<sup>べん</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>今<sup>いま</sup>  
 信<sup>しん</sup>間<sup>かん</sup>乃<sup>の</sup>板<sup>ばん</sup>本<sup>ほん</sup>に<sup>に</sup>香<sup>かう</sup>之<sup>の</sup>記<sup>き</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>所<sup>しよ</sup>四<sup>し</sup>季<sup>き</sup>  
 の<sup>の</sup>原<sup>はら</sup>と<sup>と</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>圖<sup>ず</sup>して<sup>して</sup>花<sup>はな</sup>の<sup>の</sup>形<sup>かたち</sup>か<sup>か</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>か  
 や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>は<sup>は</sup>り<sup>り</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>常<sup>じょう</sup>統<sup>とう</sup>の<sup>の</sup>火<sup>ひ</sup>道<sup>どう</sup>  
 具<sup>ぐ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>一<sup>いっ</sup>じ<sup>じ</sup>  
 俗<sup>ぞく</sup>より<sup>より</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>や<sup>や</sup>正<sup>せい</sup>統<sup>とう</sup>の<sup>の</sup>香<sup>かう</sup>道<sup>どう</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>曾<sup>そう</sup>  
 て<sup>て</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>事<sup>こと</sup>宗<sup>そう</sup>信<sup>しん</sup>の<sup>の</sup>流<sup>りゅう</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>一<sup>いっ</sup>

け<sup>この</sup>書<sup>よ</sup>乃<sup>の</sup>奥<sup>おく</sup>事<sup>こと</sup>と<sup>と</sup>志<sup>し</sup>野<sup>の</sup>家<sup>け</sup>も<sup>も</sup> 西<sup>や</sup>三<sup>さん</sup>条<sup>じょう</sup>家<sup>け</sup>  
 の<sup>の</sup>傳<sup>でん</sup>り<sup>り</sup>事<sup>こと</sup>知<sup>ち</sup>ら<sup>ら</sup>一<sup>いっ</sup>  
 能<sup>のう</sup>所<sup>しよ</sup>孫<sup>そん</sup>姓<sup>せい</sup>ハ<sup>ハ</sup>中<sup>ちゆう</sup>尾<sup>び</sup>名<sup>な</sup>ハ<sup>ハ</sup>真<sup>ま</sup>能<sup>のう</sup>春<sup>しゆん</sup>鷗<sup>おう</sup>齋<sup>さい</sup>  
 と<sup>と</sup>号<sup>ごう</sup>と<sup>と</sup>足<sup>あし</sup>利<sup>り</sup>家<sup>け</sup>の<sup>の</sup>童<sup>どう</sup>朋<sup>ぽう</sup>と<sup>と</sup>り  
 真<sup>ま</sup>相<sup>さう</sup>ハ<sup>ハ</sup>相<sup>さう</sup>阿<sup>あ</sup>弥<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>真<sup>ま</sup>能<sup>のう</sup>孫<sup>そん</sup>執<sup>しやく</sup>阿<sup>あ</sup>弥<sup>あ</sup>  
 が<sup>が</sup>子<sup>こ</sup>なり<sup>り</sup>經<sup>きやう</sup>岳<sup>がく</sup>と<sup>と</sup>号<sup>ごう</sup>一<sup>いっ</sup>松<sup>しょう</sup>岩<sup>がん</sup>齋<sup>さい</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>茲<sup>こゝ</sup>  
 照<sup>しょう</sup>院<sup>いん</sup>殿<sup>でん</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>す  
 珠<sup>しゆ</sup>光<sup>かう</sup>ハ<sup>ハ</sup>南<sup>なん</sup>都<sup>と</sup>祢<sup>ね</sup>名<sup>な</sup>号<sup>ごう</sup>の<sup>の</sup>傳<sup>でん</sup>系<sup>けい</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>と<sup>と</sup>同<sup>どう</sup>



御

松平八氏より字珠報珠光が弟子より

或ハ松平道貞と云々

御厚意と云々  
御厚意と云々  
御厚意と云々  
御厚意と云々

有り宗信湯家と云々  
有り宗信湯家と云々  
有り宗信湯家と云々

小島よりかたのぶ

文龜元年百五代  
後柏原院の五年

号より享保十九寅年迄二百四十四年

小かり宗信姓ハ志野字三郎右衛門

と云より慈照院殿に侍

○香合式

此筆記ハ香合の式と宗信事のこと

此ノ書より是も三條殿ハ湯家

よりより定らむ式より新代香

合の式より余師家より別々香合

後菴の判の詞より  
道徳院公乃

香道集の支所

三十三



の跋と云ゆの、本書の字あると傳ふ  
茶物合ハ東山殿の式判の綱云ある  
書られと傳ふ  
後菴ハ牡丹花老人と号し、青柏  
子と云人是より其法の香好す、三毫  
記と云ものあり、香と花と酒とす、あ  
ゆり、あるや、貞平親王の孫とて、  
播州吳服里にあり、風雅の隠士なり

此省巴の奥書の中条本又十ヶ条  
と云ものハ志野宗信が記せり、甲午九  
ヶ条と揚り、書とほげ、字をきせ  
し、あり、本本と云方、るべし  
永保元、百七代、正親町院元年也  
享保十九年まで、百七十七、百七十八、  
省巴の小傳、前より、り、り  
○宗溼六十一、持名香記考

香道集 支所 二



け六十一様名番ハ沙家の六十六様  
 下方へひて申と出入して宗信あり  
 一と宗信傳く又子省巴は家  
 祀して傳く一書より始の十一様ハ家  
 乃十様の番ハ園城寺と追加するもの  
 方り下五十様七回十一様ハ沙家乃  
 五十様の名番ハ内よりを録る  
 沙家の名番百三十様ハ内より十二様

と入道卷所抄の中より三様と入る  
 ハ宗信在世の所乃名番と見くはる世と  
 乃六十一様と云名番の目見あり  
 奥書ハ知命之後と云ハ五十歳ハ  
 と云事より論緒ハ五十知天命あれ  
 ハ是と判くより不寒齋省巴ハ後  
 のらく宗信の末子より名ハ信方字ハ  
 孫次郎と云一人より省巴の後子孫



よ香道と交はぐものり弟子は隆  
 勝あり天正二年八百七代 正親所帝  
 の元年号享保十九年中で百六十一  
 多よたありり宗温ハ宗信子あり  
 名ハ祐憲字ハ弥三郎とありり

香道真之棊上終



